

2025. 4. 6 (日) ルカ 23 : 44 ~ 49

23:44 さて、時はすでに十二時ごろであった。全地が暗くなり、午後三時まで続いた。

23:45 太陽は光を失っていた。すると神殿の幕が真ん中から裂けた。

23:46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

23:47 百人隊長はこの出来事を見て、神をほめたたえ、「本当にこの方は正しい人であった」と言った。

23:48 また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、これらの出来事を見て、悲しみのあまり胸をたたきながら帰って行った。

23:49 しかし、イエスの知人たちや、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちはみな、離れたところに立ち、これらのことを見ていた。

<説教>

本日の聖書には、イエスが十字架で死なれたこと(46)を中心に、それに伴って起こったこと(44-45)及び、人々の様子(47-49)が記されています。

まずイエスの十字架の死に伴って、不思議なことが起こりました。一つは太陽が光を失っていたことです(44-45a)。これは普通の自然現象としての日食とかではなく、超自然的な神のみわざでした。神はこの暗黒によって、イエスを十字架につけた人々の罪に対する怒りとさばきの御思いを表されました。イエスを十字架につけた人々とは、このときのユダヤ人たちだけでなく、私たちを含めた全人類のことです。「光であり、闇が全くない神」(Iヨハネ 1:5 参照)が人類の罪に対する御怒りのゆえに「御顔を隠された」ということをこのときの暗黒は表していました。そんな神の御怒りを、そのときのイエスが私たちの代わりに受けてくださって十字架についておられたのです。そして、そのようにして神のみこころに完全にお従いになって十字架にかかっておられるイエスの栄光を、神はこの超自然的な出来事によってお現しになったということもできるのです。

そしてイエスの十字架の死に伴う不思議な出来事として、続けてルカが記したのは、神殿の幕が真ん中から裂けたことです(45b)。もちろん、このことも神のみわざでした。この幕は、神殿の聖所と至聖所を仕切る垂れ幕のことと考えられています。それで、その幕が裂けたということは、聖所と至聖所の仕切りがなくなったということになります。それが意味することは、「ヘブル人への手紙」9-10章に詳しく記されていますが、要するに、イエスが十字架でご自分の肉を裂かれ、血を流されたことによって罪の贖いのみわざが完成して、天国への道が開かれたということです。イエスが〈新しい契約の仲介者〉(ヘブル 9:15)となってくださり、神と人との仕切りの幕がなくなったということです。それまで聖所には祭司たちが毎日入って、また至聖所には大祭司だけが年に一度だけ入っていけにえを捧げ、自分自身と民の罪を贖っていました。そういう儀式が聖所で毎日また毎年繰り返して行われて来ていました。そうやって祭司、また大祭司が神と人との仲介者としての働きをしていたわけです。しかし、イエスが十字架で死なれて〈…大祭司として、…雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました〉(ヘブル 9:12)。イエスは〈ただ一度だけ、世々の終わりに、

ご自分をいけにえとして罪を取り除くために現れてくださいました) (同 9:26)。〈私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。〉 (同 10:19-20)。もう動物のいけにえやその血を捧げるような旧約の儀式はイエスにの十字架によるの〈世全体の罪のための宥めのささげ物〉 (I ヨハネ 2:2) によって完全に廃止されたのです。イエスとともに、イエスが仲介者である〈パラダイス〉への道が開かれたのです。それで、この〈神殿の幕が真ん中から裂けた〉出来事もまたイエスの栄光を現す神のみわざだということができます。

そのイエスが十字架の上でついに息を引き取られるときに言われたみことばでルカが記しているのが、「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」ということです(46)。なお、〈息を引き取られた〉というところが、「マタイの福音書」には〈霊を渡された〉(マタイ 27:50)と記され、「ヨハネの福音書」には〈霊をお渡しになった〉(ヨハネ 19:30)と記されています。詩篇 31 篇 5 節に「私の霊をあなたの御手にゆだねます。まことの神主よ。あなたは私を贖い出してくださいます。」とあります。イエスはこの詩篇を祈られました。この詩篇はダビデが苦難の中にありながら主なる神への全き信頼をもって祈ったものでした。「あなたは私を贖い出してくださいます」とは、イエスの場合は復活のことになったでしょう。そのようにイエスは、父なる神が必ず自分をよみがえらせてくださると全く信頼しておられました。こうなると、イエスは十字架で人々によって殺されたというよりもむしろ、自ら進んで死なれたということがわかります。もちろん既にそのことはイエスが〈自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた〉(I ペテロ 2:24)などで私たちは知らされていることですが。もっとも、考えてみれば、イエスはすべてにおいて主権者なので死なれるときも主権的であるのは当然ではあります。そのようにイエスはご自分をよみがえらせてくださる父なる神に「父よ」と全き信頼をもって呼びかけ、ご自分の霊を父の御手にお任せになりました。そういうイエスなので、イエスはご自分に全く信頼する者、イエスがご自分とともにいることをお許しになる者の霊をも父なる神の御手におゆだねになりました。そして、イエスご自身が、イエスを信じる者がその霊をゆだねるべきお方として立っておられました。それ故、イエスがあの一人の犯罪人に、イエスとともにパラダイスいることを約束されました。また、ステパノも「主イエスよ、私の霊をお受けください。」と祈ることができたのです(使徒 7:59)。

さて、そのようにして十字架で死なれたイエスを見た人々のことが 47-49 節に記されています。一人はローマの百人隊長でした(47)。彼は遅くともイエスが十字架につけられたときからはイエスのことばを聞き、行動を見ていました。十字架につけられたときの祈り、犯罪人に対する約束、父なる神への全き信頼の祈り、それらを実際に見聞きして、彼もイエスは罪無き正しいお方であることを証言する者となりました。

群衆はどうだったでしょう(48)。イエスを十字架につける前より少しは良心に痛みを覚えているようにも見えます。がしかし、早々に帰って行ってしまいました。

一方、そんなエルサレムの群衆とは違う一群の人々がいました(49)。〈知人たち〉とは誰か分かりません。もしかしたら、イエスから遠く離れてしまっていた弟子たちのことを敢えてここではそう記したのかもしれませんが。〈ガリラヤからイエスについて来ていた女たち〉はこの後、イエスの埋葬まで見届けることとなります(55)。

こうして「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」と十字架で最後のみことばを語り祈られたイエスは、父なる神とともにその栄光を現しておられました。このイエスがただ一度限りの十字架によって私たちの罪の赦し、贖いのみわざを完全になさってくださいました。私たちはこのイエス・キリストに全く信頼し、私たち自身を、その霊もからだも全くおゆだねして歩んで行かなければなりません。